ご供養お願いします。

龍川歌凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ご供養お願いします。

【Ｎコード】
Ｎ３２９３Ｃ

【作者名】
龍川歌凪

【あらすじ】
青野翔太はミュージシャンを夢見る１７歳。そんな彼の元に現われた幽霊少年、誠。彼は自分を供養してくれたら“本当の願い”を叶えてくれるという。さて、翔太の“本当の願い”とは・・・？

「僕を供養してください」
突然翔太のアパートにやってきた謎の少年。
これが悪夢の始まりであった・・・。

青野翔太（あおのしょうた）はつい先日、１７歳の誕生日を迎えたばかりである。しかし祝ってくれる者は一人もいなかった。なぜなら彼はひとり暮らしかつ、学校に通っていないからだ。
別に両親が亡くなったとか、引きこもりだとか、そういうわけではない。
ひとり暮らしなのは独りで上京したからであり、学校に行っていないのは、ただ単に金がないからである。
そう、彼は家出したである。
彼はミュージシャンになるのが夢だった。しかし専門学校に行きたいという要望を両親に聞き入れてもらえず、口論の末、荷物をまとめて家を出たのである。
だがそう簡単にミュージシャンとして成功するわけも無く、今はバイトを掛け持ちしてなんとか食いぶちを稼いでいる、いわゆるフリーターであった。

ある夜、バイト帰りの翔太はへとへとだった。
（夕飯作んのメンドくせーな）
そう思い、台所でカップラーメンにお湯を注ぎ、食べる準備をしていると。
ピンポーン。
玄関のチャイムが鳴った。
（なんだよこんな時にー）
そう思いつつも「は～い」と返事をし、玄関のドアを開ける。

そこには見知らぬ少年が立っていた。中学生くらいだろうか？髪も肌も真っ白で、病人かどこぞのお坊っちゃんといった感じである。
『青野翔太さんですよね？』
「はあ、そうですけど・・・」
押し売りにしては若すぎる。宗教の勧誘か何かだろうか。子供を使って勧誘するところもあると聞く。
『初めまして。僕、誠（マコト）っていいます。あなたにお願いがあって来ました』
「お願い？」
『はい、僕を供養してください』

パタン。ガチャ。

翔太は居間にある電話へと向かった。
（やっぱ怪しげな宗教団体だったか・・・。でも念のため警察に電話を・・・）
『ひどいなー、いきなり閉め出すなんて』
「ヒィッ！？いるっっ！！？」
さも当然と言わんばかりに、ちゃぶ台の前に正座している少年。
なんとも正々堂々とした不法侵入である。
「ど、どうやって中に・・・？」
窓には鍵がかかっているはずだ。第一、物音一つ立てずに先回りするなど、不可能である。
『ああ、そんなの簡単ですよ。壁を通り抜けてきたんです』
「壁を通り抜け・・・って、そんなこと人間にできるかよ！！」
いくらなんでもそれはありえない。大方（おおかた）どこぞのサスペンスドラマの密室殺人のように、何らかのトリックを使ったに違いない。
『だから～、人間じゃないんですってば』
「へ・・・？」
『僕、幽霊ですから』

にっこりとほほ笑む少年。

翔太の時が止まった。ショックのあまり声が出ない。

『あれ？固まっちゃいました？』

翔太の顔の前で手を振り、『お～い』と呼びかける。

「ゆ、幽霊って・・・お前ちゃんと足あるじゃないか！？」

翔太はやっとの思いで口を開いたが、まだ声が震えている。

そんな彼に向かって、少年は諭すように語り掛けた。

『今どき足の有る無しで幽霊を見分けたりなんてしませんってば。とにかく落ち着いて僕の話を聞いてくださいよ、ね？』

「『ね？』って言われても・・・そもそも俺はお前なんて知らねえし、なんでよりによってうちに来るんだよ！？」

近所で子供が亡くなったという話は聞いていないし、身内は皆、翔太より年上である。それにこのような白髪頭の少年、一度会ったら忘れるはずもない。

『そりゃそうですよー、僕ら初対面なんですから。ささ、立ち話もなんですし、どうぞお座り下さい』

少年はちゃぶ台を挟んだ自分の真正面に翔太を座らせた。

他人（ヒト）の家でずいぶんといい度胸である。

『先程も申しましたが、僕は誠。あなたの遠縁に当たります。一ヶ月くらい前に病死したばっかりの、死にたてホヤホヤの幽霊です♪』

「し、死にたてホヤホヤって・・・。つーか初対面なのになんでうちの住所知ってんだよ？」

翔太は両親にすら自分の居場所を知らせていない。まあ家出なのだから当然と言えば当然なのだが・・・。

幽霊というのは透視までできるのだろうか？？

『地元の＜浮遊霊サポートセンター＞で聞いたんですよ』

「なんじゃそりゃあ！？」

『死んだばかりの新米浮遊霊の為の相談所ですよ。知らないんです

か？』
「知るかぁ！！」
幽霊にサポートなど必要あるのか？いや、それよりもそのセンター、なぜ自分の住所を知っているか。どこかにスパイでもいるのか？？
ツッコミどころが多すぎである。
『それでですねー、実は僕、先に両親を亡くしてるんですよ。その時は親戚の家に引き取ってもらったからまあ良かったんですけど、そのあと僕も病気になって死んじゃいまして・・・。しかし親戚からの供養は足りず、僕は成仏できませんでした。だからこうして遠縁である翔太さんに、供養のお願いをしにうかがったというわけなんです』
「そうか・・・まあとりあえず事情はわかった。でもなんで俺なんだ？その親戚にもう一回頼みゃいいだろーがよ？」
『あの人たちには僕の姿が見えないんですよ。霊感が低いですから』
「俺だって今まで霊なんか見たことなかったぞ」
『・・・もしかして、気づいてないんですか？』
「え？何が？」
『ここ、“霊道”とつながってるんですよ。つまり霊の通り道です。夜寝苦しいとか、誰もいない部屋から物音がしたとか、物が勝手に動いたとか、そういうことってありませんでしたか？』
「いや、全然。」
『・・・ほんっっとに霊感ゼロなんですね・・・』
誠は思いきり嘆息した。どうやら青野一族はとことん鈍感なようである。
「ち、ちょっと待て！つーことは今、ここにはお前以外にも霊がいるってことか・・・？」
『そりゃあもう！まるで飴玉に群がるアリの大行列のように、我も我もと・・・』
「気持ち悪い例えすんな！・・・・・・でもじゃあなんでお前のこ

とは見えるんだ？他の霊は気配すら感じないのに・・・」
『そりゃあ一応あなたは僕の血縁者ですからね。血のつながりがあったほうが“視（ミ）え”やすいんですよ。それに加えて“霊道”の力と、＜センター＞が僕に与えてくれた力のおかげでもありますね』
（ちっ、センターめ、つくづく余計なことを・・・）
翔太は心の底からセンターを呪った。
だが＜浮遊霊サポートセンター＞はともかくとして、その“霊道”とやら、心当たりがないわけではなかった。
このアパートは駅にも近く、日当たりも良好。トイレ、バスつきで広さもそれなり。それでいて比較的安価であった。
このような好条件にもかかわらず、なぜかそれまで売れ残っていたのだ。
今思うと、それはこの部屋に住んでいた人が皆、出て行かざるを得ない状況に陥ったからなのかもしれない・・・。
『ね？お願いしますよ～。お墓参りしてくれるだけでいいんです。もし引き受けてくださったら、１つだけ、あなたの願いを叶えて差し上げますから』
「願いを叶えるぅ？地縛霊にそんなことできんのかよ？」
『地縛霊じゃなくて浮遊霊ですってば！・・・まだ成仏もしていない半人前だから、大したことはできないけど、僕に出来ることだったら何だって致しますよ』
「ふーん、じゃあ≪大金持ちにしてくれ≫とかはまず無理そうだな。お前じゃ。」
完全にナメられている誠であった。
『うっ・・・悔しいけど、おっしゃるとおりです・・・。で、でもあなたの本当の願いはそんなものじゃないはずです！幽霊の僕にならわかります！自身でも気がつかないであろう、あなたの“本当の願い”が！！』
「へっ、どうだか。どうせ適当なこと言って俺をだまそうってんだろ？だいたい幽霊ってフツー、『夜中に金縛りで目が覚め、ふと枕

元を見ると、青白い顔をした見知らぬ男が立っていた・・・！』とか、そういうもんなんじゃねーの！？なんだそのフレンドリーかつ生き生きとしたサマは！？」

翔太はビシッと人差し指を突きつけた。

『だから～、それじゃ皆さん怖がって逃げちゃうでしょ？下手したら拝(おが)み屋さんとか呼ばれて除霊されちゃうかもしれないし・・・。これも＜浮遊霊サポートセンター＞からのアドバイスなんですよ！』

「ほんっと余計なことばっか吹き込みやがるな、そのサポートセン・・・・・って、あれ？」

『どうかしましたか？』

突然、何かが翔太の頭をよぎった。

何か忘れているような気がする。何だっただろう。思い出せない。何かとても大切なことだったような気が・・・・・・。

「あーーーーっっっ！カップメン！！お湯入れた後すっかり忘れてたぁ！！」

翔太は慌てて台所に向かった。

――――数秒後、変わり果てた姿になったカップメンが発見された。

『あ～あ、見事に伸びきってますねぇ』

「『伸びきってますねぇ』じゃねえ！お前のせいだろが！！お前がこんな時に来るから・・・ああ、俺のカップメン～・・・！」

翔太は目に涙を浮かべて怒鳴りちらした。

毎日バイト三昧の彼にとって、食事は数少ない楽しみの一つだったのだ。ゆえにこれは相当ショックだったに違いない。

『ご、ごめんなさい！知らなかったもので・・・・・・。で、でもこんなものばっか食べてたら身体に悪いですよ！どうせラーメン食べるんだったらせめて手作りのほうが・・・・・・あ、そうだ！じゃあ代わりに僕が作って上げますよ！僕が役に立つ霊だってトコ、見せて差し上げます！！』

ということでラーメンを作ることになった誠。
「もうどうにでもなれ！」、と半ばヤケクソの翔太は、テレビを見ながら出来上がるのを待つことにした（あのカップラーメンは食べようと思えば食べられたのだが、誠に取り上げられてしまった）。
『さて、それじゃ始めますかね。さっきのカップラーメンは塩味だったから、今度のも塩味にしようかな』
しかしここで重大な問題が。冷蔵庫の中には醤油ラーメンしかなかった。
『ま、お湯にお塩溶かせば同じだよね』
そう言って、ドンブリに塩をドバドバと入れてお湯を注ぐ誠。
恐ろしく楽観的かつ大ざっぱな少年である。そもそもそこまで塩ラーメンに固執する必要はないというのに・・・。
だがこの時彼は気づいていなかった。彼が入れたものは塩ではなく、砂糖であったことに・・・・・・！
『ネギもないなぁ。ま、代わりにオクラでも入れとこっかな、けっこう合いそうだし。チャーシュー・・・どころか肉もないや。よし、そんじゃこの残り物らしき焼きじゃけでも入れて・・・』

こうして誠特製塩ラーメン（らしきもの）が完成した。
『できましたよ～、翔太さん！』
「おう！」

この日、アパートの住民全員が、悲鳴にも似た謎の奇声を耳にしたという・・・。

翌朝、翔太は誠の墓参りに出かけた。
もちろん善意からではない。ただ単にもうこの少年とは関わり合

いになりたくないというだけである。
『早速行ってくれるのは嬉しいんですけど、朝ごはん食べずに行くんですか？身体に悪いですよ』
「うるせーな、昨日の後遺症で胃に何も入れたくねーんだよ・・・」
結局昨夜は気分が悪くなり、何も食べずに眠った翔太であった。
二人が外に出ると、とたんに誠の姿が透け始めた。
「お前、体が・・・！」
『ああ、気にしないで下さい。“霊道”を離れたせいでうまく実体化できなくなっただけですから。あ、ちなみに普通の人には僕の姿は【視え】ませんからね。一度僕を【視て】＜縁＞ができた貴方は別ですけど』
「え、＜エニシ＞・・・？な、なんかよくわかんねーけど、そうなのか？」
『ええ、ですからあんまり僕に話しかけないほうがいいですよ？でないと独り言の多い変人だと思われますから』
ふと、翔太は誰かの視線に気づき、アパートの階段に目を向けた。するとうわさ好きで有名なおばちゃん、竹田さんが黙ってこちらを見つめている！
翔太と目が合うや否や、おばちゃんはそそくさと立ち去っていった。
（しばらくはうわさの的になりそうだな・・・）
翔太はがっくりと肩を落とした。

墓地までの道のりはそう遠くなかった。電車でだいたい３０分といったところか。
途中で花とお供え物のまんじゅうを買い、翔太は誠の墓へと向かった。
そこには墓石と、その横にもう一つ、小さなお地蔵さんが立っていた。しばらく誰も来てくれなかったのか、花は枯れ、ところどころ鳥の糞が落ちている。

『すみません、うちの親戚はみんな忙しいうえにあまり信心深くないもので・・・あの、良かったら掃除もしていっていただけないでしょうか・・・？』
「え？ま、まあ、別にいいけどよ・・・」
さすがにかわいそうになり、翔太は墓掃除を引き受けてやることにした。
だが翔太はこれまで、墓の掃除などろくにしたことがなかった。たまに両親と共に先祖の墓へと赴き、米や線香を供えたり、墓石に水をかけたりするくらいのものだったのだ。
ましてや掃除する気など全くなかったので、道具も一切持ってきていない。
しばし途方に暮れていると、墓石の裏に掃除用具一式が置いてあるのに気づいた。きっといつでも掃除できるように常時置いてあるのだろう。
これ幸いと、翔太はその中からブラシを取り出し、墓石を磨こうとした。すると。
『あ、ちょっと待ってください。そっちのお地蔵さんは無縁仏（むえんぼとけ）である僕のですから、洗う時はこっちのスポンジでお願いしますね』
「そんなの何で洗ったって同じだろ！」
『あなたは人の顔をブラシで磨くんですか？』
「顔っつってもどうせ石像じゃんか！」
『そんな考えの人ばかりだから、僕みたいに成仏できない霊が出てくるんでしょう？』
「うっ・・・」
それを言われると返す言葉もない。翔太はしぶしぶと従った。
何はともあれ、墓は見違えるように綺麗になった。最後に花とまんじゅうを供え、完成である。
『ありがとうございます翔太さん！これで僕も浮かばれます！』
「そうか、そいつは良かったな。安らかに眠れよ。そんじゃあばよ

！」
翔太がとっとと帰ろうとすると。
『何言ってるんですか、誰が今すぐ逝くって言いました？』
「へ？」
『まだあなたの願いを叶えてません！』
「な・・・っ！？別にいいよそんなの！もうお前につき合わされるのはまっぴらごめんだ！！」
『い～え！そーはいきません！！何の恩返しもせずに逝くなんて、僕のプライドが許しません！それに＜サポートセンター＞の方(かた)からも「少しでも幽霊のイメージアップになることをしてきて下さい」って言われてるんですから！』
「逆にイメージ下げてんじゃねーかよ！！」
『と、とにかく！誰がなんと言おうと、僕は恩返しするまで絶対に貴方に【憑(つ)いて】いきますからね！！』
「マ、マジかよおい～・・・」
こうして誠は無理やり翔太に【憑(つ)いて】きた。ありがた迷惑にもほどがある。

『ところでこれからどこ行くんですか？』
「んーそうだな、どうせ今日のバイトは夜からだし、とりあえず一回家に帰って、その後床屋にでも行くよ」
『床屋？髪切るんですか？』
「いや、髪を金か茶に染めようと思ってさ。やっぱロック系ミュージシャン目指すんだったら髪染めて無造作ヘアーとかにしとかねーと・・・」
翔太は前髪をいじりながら言った。
彼の髪は母親と同じ真っ黒のストレート。天然パーマに悩む女子ならばさぞ羨ましがることだろうが、あいにく彼はそれを良しとはしなかったようだ。
『若いうちに髪の毛いじくりすぎると将来はげますよ』

「余計なお世話だ！！つーかお前はどうなんだよ！？脱色したり染めたりしてんじゃねーのか！？」
翔太は誠の真っ白な頭を指差して言った。
『ああ、これは白髪ですよ』
「うそつけ！その年でそこまで真っ白になるかよ！！」
『そりゃまあ普通に考えればそうなんですけど・・・僕、長いこと病院で寝たきりになってたんで、ストレスからかだんだんと白髪が増えてきちゃって・・・。死ぬ頃にはこんなになっちゃったんですよ、はは・・・」
誠はポリポリと頭を掻いて苦笑した。
しかし翔太はもしや聞いてはいけないことだったのではないか、と自分の軽率な発言を少し後悔した。
「そ、そっか・・・。そいつは悪いこと聞いちまったな、ごめん・・・」
『別に気にしてないからいいですよ。それよりその髪、大事にしたほうがいいですよ？僕も昔は貴方みたいに真っ黒だったんですからね！』
「ああ、仕方ねーな、わかったよ・・・。んじゃま、とりあえず家帰るかとすっか。たまには家でゆっくりするのもいいかもしれねーしな！」
『ええ、それがいいですね！』
誠はにっこりと微笑んだ。

こうして二人は共に家へと帰っていった。

夜、翔太はコンビニでレジ打ちのバイトをしていた。誠は暇そうに店内を浮遊している。
本当は、翔太は誠をアパートに置いていきたかった。しかし誠は翔太に取り憑いているので、あまり遠くまで離れられないのだ。

ゆえに「おとなしくしていること」、「話しかけないこと」を条件に、ここまで連れてきたのである。

店内はけっこう混んでいた。部活帰りの中学生や高校生が、家に帰るまでの腹ごしらえの為にやって来るのである。

瞬く間にレジの前に列ができ、翔太はあくせくと作業を進めていた。

と、誠が何気なく周囲を見渡した時、高校生らしき男子がなにやら不審な動きをしているのが目に入った。

万引きである。

『た、大変です翔太さん！万引きが・・・！』

「３９８円になりまーす。５００円お預かりいたします」

『聞いてるんですか翔太さん！？』

「１０２円のお返しになります。ありがとうございました～またお越し下さい～。いらっしゃいませこんにちは～」

『翔太さんってば！！』

ぎろり。

翔太は無言で誠をにらみつけた。その目は明らかに「話しかけるなって言っただろコノヤロー除霊すっぞコラ」と言っている。

そうこうしているうちに、万引き犯は店から出ようとしていた。

『あっ、待っ・・・！くそっ、こうなったら・・・！』

バン！！

突然、自動ドアがものすごい勢いで閉まった。万引き犯はとっさにドアを力いっぱい引っ張ってみたが、びくともしなかった。

彼が途方に暮れていると。

「な、なんだ！？」

「きゃあっ、じ、地震！？」

なんと、店内がグラグラと揺れ始めたではないか！

しかし実際に揺れているのは棚や商品だけであり、店自体は全く揺れていなかった。また、店の外ではそんな騒ぎなど露知らず、平

和そのものである。
地震ではない。
そう、誠が＜浮遊霊サポートセンター＞から授かった力で引き起こした、ポルターガイストである。
そしてまるで意思を持つかのように倒れてきたコピー機の下敷きとなり、万引き犯は身動きがとれなくなった。
『やりましたよ翔太さん！僕が捕まえたんですよ！』
嬉々として翔太の元へと向かう誠。
だがそれとは対照的に、不気味なまでに静かな翔太。
「へー、これ、全部お前がやったんだ・・・」
『ええそうですよ！僕が万引き犯を捕まえ・・・』
「ふざけんなーーーーーっっっ！！！」
翔太はついにぶち切れた。
「なんでお前はそうやって俺の邪魔ばっかするんだよ！？なんか恨みでもあんのか、ええ！？」
『そ、そんな・・・僕はただ、万引き犯を捕まえようとして・・・』
「うるさいうるさいうるさーい！！言い訳なんて聞きたくない！もうお前の顔なんか見たくもない！俺の目の前から消え失せろ！」
『でも・・・』
「だまれ！お前なんかどっか行っちまえ！この役立たずのおせっかい疫病神めが！」
するとさすがの誠もこれにはカチンと来たらしい。
『・・・わかりましたよ』
そう言って、誠は店の壁をすり抜け、去って行ってしまった。

その日以来、彼が戻ってくることはなかった・・・。

（あいつがいなくなってから、もう3日か・・・）
朝、翔太はトーストを食べながら物思いにふけっていた。

（思えばあいつ、ちょっと不器用なだけで、別に悪気があってやってたわけじゃないんだよな・・・）
あのくそまずいラーメンを作ったのは、ただ単に手作りのラーメンを食べさせたかっただけであるし、ポルターガイストを起こしたのも、何が何でも万引き犯を捕まえたかった（らしい）からなのである。
全て翔太の為を思ってやったことなのだ。
そう思うと、少し悪いことをした気がする・・・。
「いやいや！！そもそもあいつがうちに押しかけてきたのが悪いんだ！俺は巻き込まれただけだ！うん！！」
翔太はブンブンと頭を振り、自分に言い聞かせた。
「それより今は今日のことだけを考えないとな！」
今日は待ちに待ったオーディションの日なのだ。もしかしたら彼の運命を大きく変えるやも知れぬ、大事な大事な日なのである。

朝食を終え、最後の荷物確認をすると、翔太はマイギターと共に家を出た。そして最寄の駅にて電車を待つ。
（この電車に乗ったら御六（みろく）駅で乗り換えか。順調に行けば３０分前には会場に着くな）
翔太が胸を弾ませながらホームに立っていると。
ピンポンパンポーン。
アナウンスが流れた。
『ただ今車両に不審な音が生じたとの報告があり、点検のため、上り電車一時運転を見合わせております。お客様には大変ご迷惑を・・・』
「はぁ！！？」
翔太は思わず大声を上げた。周囲でも「『不審な音』ってなんだよ！？」というツッコミが飛び交っている。
全くもってその通りなのだが、今は相づちを打っている場合ではない。

電車で行くのをあきらめ、翔太は近くのバス停へと向かった。そこで時刻表を見てみると、少々遠回りではあるが、御六駅まで行くバスがあった。

助かった！と翔太はすぐさまバスに乗り込んだ。

が、すぐに渋滞に巻き込まれ、バスは全く動かなくなった。

（あ～もう！何でこんな時に・・・！）

仕方なく途中のバス停で降りると、翔太は近くの私鉄駅へと猛ダッシュした。

本当は私鉄だとさらに遠回りになってしまうのだが、このままバスが動き出すのを待つよりかはマシである。

駅に着き、電光掲示板を見てみると。なんと御六駅行きの電車があと1分で発車するというではないか。

翔太は急いで切符を買い、階段を駆け下りていった。

が、その途中、なんと前方にご老人の軍団が！

下り階段いっぱいに歩いているので、追い越すことができない。また上り階段は駆け上がってくる人々の群れで溢れており、流れに逆らうことはできなさそうである。

（なんなんだよさっきから～！）

翔太は心の中で地団駄を踏んだ。

しかし普通に「すみません、通してください！」とでも言えば皆どいてくれると思うのだが、残念ながら今の彼にはそのような心のゆとりは存在しなかった。

そんなこんなでとうとう翔太は電車を逃してしまった。

それでも翔太は諦めず、次の電車に乗り、御六駅に着くのを待った。

御六駅までは約１０分。その間、吊り革につかまりながら色々と思案する。

この電車で間に合うだろうか？

途中で待ち合わせのための停車とかしないだろうか？
無事会場まで辿りつけるだろうか・・・・・・？？

一度考え始めると、心配事は次から次へと湧き上がってきた。

たとえ会場に着けたとしても、オーディションに見事合格できるだろうか？
いや、それ以前にちゃんと歌えるだろうか？
もしかしたら緊張で声が出なくなるかも――――・・・・・・。

（――って・・・）
いつになったら御六駅に着くというのだ？もうずいぶん長く乗っているような気がするが・・・。
翔太は不安になり、隣の人に尋ねてみた。
「あの、御六駅にはいつ頃到着するかわかりますか？」
「御六駅・・・？ああ、これは快速電車ですから、もう通り過ぎちゃいましたよ」
「え、ええ～～っっ！？」

本当に、今日という日は一体何なのだろう・・・。

次の駅に着いたとたん、翔太は全速力で反対方面の電車へと乗り換えた。
だがその努力もむなしく、御六駅に到着したのはオーディション開始の5分前。これからさらに乗り換えていては、もう間に合わない。
「ああ、何で今日に限って、こんな・・・」
翔太はただただうな垂れるしかなかった。
（でもせっかくここまで来たんだ。せめて買い物でもして帰ろう）
そう思い、翔太は駅を出た。

スーパーか百貨店でも無いか、としばらく歩いていると、交差点に何やら人ごみができているのが目に入った。
近くにはパトカーが停まっており、そのそばには奇妙にフロントがへこんだトラックと、横転した普通自動車が、その無惨な姿を晒していた。
交通事故である。
救急車がいないところを見ると、おそらく事故が起きてからしばらく経っているのだろう。
（あの車、実家の車と同じ型だな・・・）
それゆえか、はたまた生来のやじ馬根性ゆえか、翔太は人ごみの中へと入っていった。
すると近くでおばさん二人が事故について話しているのが聞こえてきた。
「どうやら右折事故だったらしいわよ」
「あらまあお気の毒に・・・。中の人は無事だったのかしら？」
「確かトラックの運転手はかすり傷程度で済んだらしいんだけど、自動車に乗っていた夫婦二人は重症だったみたいよ。ご主人のほうはさっきまで意識があったんだけど、今は二人とも意識不明の重態なんですって」
「あらそうなの・・・ご家族はこのことご存知なのかしらね？」
「それがね、ご主人いわく一人息子が家出中らしいのよ！」
「あらやだ！」

夫婦が事故・・・？一人息子が家出・・・？

「奥さんもうわ言で息子さんの名前を呟いてたわ。確か・・・『しようた』って」
「なんだって！？」
翔太は二人の間に割って入った。突然のことにおばさん二人はひどく面食らっていた様子だったが、今の翔太にはそんなことどうで

も良かった。
「その話、詳しく聞かせてください！」

病院の手術室前で、翔太は息を切らせて懸命に祈りを捧げていた。
おばさん達からあの辺りで一番近くて大きい病院の場所を聞きだし、ここまで走ってきたのである。
案の定、二人はこの病院に運ばれていた。
父親のほうは出血が多かったものの、命に別状はないとのことだ。今は麻酔が効いてぐっすり眠っている。
しかし母親のほうはいまだに意識が戻らず、今なお手術が続いているのだ。

どれくらい経っただろうか。ついに手術中のランプが消え、中から一人の医師が現われた。
翔太は椅子から勢い良く立ち上がると、夢中で彼の襟首に掴みかかった。
「あ、あの、手術は・・・母さんは大丈夫なんですか！？」
「お、落ち着いてください！大丈夫、手術は無事成功だよ！」
慌てて答えた医師の言葉に、翔太は安堵と共に全身の力が抜け落ち、ぺたりとへたり込んだ。
「ほ、本当に・・・？」
「ああ、かなり危険な状態だったけどね。【奇跡的】に一命を取り留めたんだよ。どうやら打ち所が良かったみたいだね」
医師はにっこりと微笑んだ。

【奇跡】――――その言葉を連想させる出来事が、今日どれほどあったことだろう。

【不運にも】遅れていた電車とバス。

【ちょうど】道を塞いでいたご老人方。
となりにいたおばさん達から【偶然】事故のことを聞いた自分――・・・。

これらの一つでも欠けていたら、おそらく自分は今、ここにいなかっただろう。
もしかしたら親の死に目に逢えなかったかもしれなかったのだ。

だがこのような【巡り合わせ】、いくらなんでも出来すぎではないだろうか？
誰かの仕業としか思えない。そう、例えば――――・・・。

数人の医師の手により、母親の乗ったベッドが病室へと運ばれてゆく。翔太はその後について行った。
と、階段の踊り場のところに、何か白いものが見えた。それは翔太のよく知っているものだった。
そう、たんぽぽの綿毛のようにふわふわで真っ白の――――――少年の髪。
「やっぱりお前だったんだな、誠・・・」
『翔太さん・・・』
誠は顔を上げた。
「こんなお節介焼くようなやつ、お前しかいねえもんな・・・」
翔太はコツコツと階段を上っていった。だがその姿を間近で見たとたん、翔太は息が止まりそうになった。
なんと彼の姿は最後に見た時よりもさらに透けていたのである。手足の先など、もうほとんど見えない。
「お前、その体・・・」
『いや～、ちょっと＜センター＞からもらった力を使いすぎちゃいましてね。もう現世に留まる力も残ってないんですよ～、はは・・・』

誠は力なく笑った。こんな時でも笑顔を絶やさぬ奴だ。
「そんな・・・なんでそこまで・・・俺なんかのために・・・？」
誠を突き放した自分なんかのために、なぜそこまでできるのか。
翔太にはわからなかった。
『だって言ったじゃないですか。僕は貴方の“本当の願い”を叶えるまで、成仏できないって』
「俺の・・・“本当の願い”・・・？」
『ええ、そうです。貴方の“本当の願い”は、お金持ちになりたいとか、ミュージシャンとして成功したいとか、そんなんじゃないんです。貴方の“本当の願い”は、“もう一度お父さんとお母さんに会いたい”なんですよ。だから僕はなんとしてでも貴方をご両親に会わせてあげたかった。そしてそのために、僕は＜センター＞からもらった力で少しだけ未来を読んでみたんです。そしたら貴方のご両親と、あのトラック運転手が事故に遭うのが視えたんです・・・』
誠は淡々と語った。翔太はただ黙ってそれに耳を傾けていた。
『僕は残りの力を使って、その未来を変えようとしました。でもそれはとても大きな【運命】だったから、僕には変えることができなかった・・・・・・。だからせめて、事故を最小限に抑えたくって、僕は他の小さな【運命】を操作したんです。そしてそれと同時に、貴方をここまで導きました――――まあ貴方にとっては、余計なお世話だったのかもしれませんけどね・・・』
誠は苦笑混じりに言った。どうやら別れ際に言われたことをまだ根に持っているらしい。
「いや、そんなことねーよ。ありがとな」
翔太は心の底からお礼を言った。
だって彼がいなかったら、おそらく自分は何も知らずに呑気にオーディションを受けていたに違いないのだから・・・。
その翔太の言葉に、誠は満足げに目を細めた。
だがそんな彼の笑顔を蝕むように、その姿は刻一刻と薄れていった。まるで「誠」という存在そのものが、空気に溶けて消えてしま

うかのように・・・・・・。
「お前まさか、消滅・・・しちゃうんじゃ・・・？」
『はは、まさか。消えてなくなったりなんてしませんよ。ただ全ての未練が消えて、＜センター＞からもらった力も尽きて、成仏するだけです。何も心配することはありませんよ』
「でも・・・」
『だからそんな顔しないでくださいってば！これは僕にとって、とても喜ばしいことでもあるんですから。・・・・・だってこれで僕もようやく、お父さんとお母さんに会いに行けるんだもの・・・・・』
誠は遠い目をしていた。もしかしたら彼にはもう、翔太が見ているものとは別のものが見えているのかもしれない・・・。
『・・・最後に、お願いしてもいいですか・・・？』
「・・・なんだ？」
『今のうちに、ご両親にはできるだけ孝行してあげてください。親というのは、孝行したい時にはもういないものですから・・・・・。また、先立って逝ったご先祖様達のことも、拝んでやってください。多分死んだ者にとって、最も悲しくて寂しいことは、誰からも供養してもらえないことですから――――少なくとも、一族の直系が絶えて誰からも供養してもらえなくなった、僕はそう思います・・・・・』
「・・・うん、そっか、わかったよ、約束する。それにお前の一族の墓にも行ってやるから、だから安心して眠りにつきな・・・」
翔太は静かに頷いた。
すると誠は再び満足そうにほほ笑み、そして――――
『ありがとうございます翔太さん！ありが――――・・・！』
――――消えた。
翔太は病院の廊下で独り泣き崩れた・・・。

あれから二ヶ月。翔太は今も東京でミュージシャンを目指して頑張っている。
だが以前と違って、出来る限り両親のお見舞いに行くようになった。彼らとよく話をするようにもなった。
そしてその際に翔太は、自分は真剣に夢を追い続けたい、専門学校への進学は無理でも、せめて東京での一人暮らしは許して欲しい、という旨を懸命に伝えた。
するとその真摯な態度についに彼らは根負けし、不承不承彼の上京を許したのであった。

ちなみに事故に遭ったあの日、彼の両親は【突然】どこかにドライブに行きたくなり、【なんとなく】あの場所付近を走行していたのだそうだ。
その【思いつき】が誠によるものなのか否かは、今となっては知る由もないけれど・・・。

この日、翔太は新曲の作詞に励んでいた。その名も『ＧＨＯＳＴＳ　ＡＲＥ　ＣＲＹＩＮＧ』。
これは遺族にろくに供養してもらえず、成仏できなかった幽霊がグレて人々を困らせるという、なんとも過激な内容の歌である。
節をつけるのが難しそうだし、売れるかどうかはわからない。けれど少なくとも、良い歌詞を作ろうと躍起になっていた今までよりも、作っていてずっと楽しかった――――――と。
ピンポーン。
玄関のチャイムが鳴った。
（なんだよこんな時にー）
そう思いつつも「はーい」と返事をし、玄関のドアを開ける。そして彼は信じられないものを目にした。

『お久しぶりです翔太さん！』
「なっ・・・！？ま、まま・・・ま・・・」
人懐こそうな笑顔。年不相応な真っ白の髪――・・・。
「誠っっ！！？？」
翔太は目玉をひん剥いて驚いた。
「お前なんでここに・・・成仏して両親に会いに行ったんじゃなかったのかよ！？」
『ええ、確かにあの日、僕は成仏したし、ちゃんと両親にも会えましたよ。でもあの後、＜浮遊霊サポートセンター＞の方がたが僕の功績を高く評価してくださり、なんと新企画のための派遣社員として僕をスカウトしてくださったんですよ！！』
嬉しそうにピースする誠。
「・・・は？」
『それでですね～、また翔太さんにお願いがあるんですけど、聞いていただけますか？』
しかし翔太は答えない。いや、正確には驚きのあまり絶句しているというべきか。
そんな翔太の様子などおかまいなしに、翔太は口早に説明した。
『その新企画っていうのが≪出張だれでも相談≫というものなんですけど、これは土地から離れられない地縛霊や土地神などを対象とした相談サービスの一つです。やはり自由に移動できる浮遊霊だけしかサポートしないというのは不公平ですもんね！でですね、この辺りの氏神様が最近参拝客が来なくて寂しいとおっしゃってるんですけど、翔太さん、行ってくださいませんか？あ、氏神って知ってます？昔は一族の守り神として祀られていた、それぞれの地域を守護する神様のことですよ』
「・・・。」
『翔太さん？』
「・・・・・・。」
『翔太さん聞いてますかぁ？お～い』

「・・・ふ」
『ふ?』
「ふざけんなーーーーーーーーーーー!!!」

翔太の叫びはアパート中に延々と木霊した・・・。

（後書き）

ここまでお読みくださりありがとうございました。
この作品の中にはいくつか私の実体験が含まれております。なので「あ～こういうことってよくある～」と思っていただければ嬉しいです。
それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3293c/

ご供養お願いします。

2010年10月8日15時45分発行